

インドにおける日本語教育

前ニューデリー日本人学校 教諭

広島県広島市立幟町小学校 教諭 三吉孝平

キーワード 日本語教育、国際文化交流

赴任校の概要 (2025年3月現在)

ニューデリー日本人学校

JAPANESE SCHOOL, NEW DELHI

URL : <http://www.ndjs.org/>

1 はじめに

インドにあるニューデリー日本人学校へ赴任した。インドと日本は、2022年に日印国交樹立70周年を迎えた。そのインドに赴任することができたので、中学校国語科を担当する教員として、インドにおける日本語教育を調査することで、異文化への興味関心や国際理解教育をどのように進めているのかを学び、今後の教育実践に生かしたいと考えた。

2 調査・研究内容

(1) デリー大学より依頼を受け、日本語を勉強しているインド人学生の作文コンテスト

(Japanese Language Teachers Association of India) の審査を担当した。

(2) 現地校を訪問し、日本語教育を参観した。

2023年2月	ブルーベルズスクール（インド国内インターナショナルスクール）
2024年2月	ブルーベルズスクール（インド国内インターナショナルスクール）
2024年9月	ブルーベルズスクール（インド国内インターナショナルスクール）

3 調査・研究結果

(1) デリー大学より依頼を受け、日本語を勉強しているインド人学生の作文コンテスト (Japanese Language Teachers Association of India) の審査を2023年と2024年に担当した。

【作文コンテストのルールと規則】

① 参加資格

- (a) 参加者は日本人以外の国籍の人でも参加できる。
- (b) 日本語を1500時間以上学習した人、5年以上学習した人、または日本で6か月以上学習した人は参加できない。
- (c) 候補者の両親のどちらかまたは両方が日本人でないことが条件である。
- (d) 日本語教師は参加できない。
- (e) 参加者は全員、原本用紙または白紙に手書きのエッセイを提出できる。エッセイはスキャンして日本語

教師に送る。教師は、生徒が記入した情報を確認した後、エッセイを応募用紙と一緒に送信する。生徒はエッセイを委員会に直接送らない。

②ジュニア、シニア、学校部門

このコンテストは、学校で日本語を学習しているすべての生徒が参加できる。

学校部門

- (a) このコンテストは、学校で日本語を学習している生徒が参加できる。
- (b) エッセイは400～600字でなければならない。
- (c) 参加者の年齢は17歳以下でなければならない。
- (d) 日本語教師は参加できない。

ジュニア カテゴリー

- (a) ジュニア カテゴリーは、日本語を500時間以下勉強した人のみが参加できる。
- (b) ジュニア カテゴリーのエッセイは1000語以内で書く。
- (c) 参加者の年齢は25歳以下でなければならない。

シニア カテゴリー

- (a) シニア カテゴリーは、日本語を1500時間以下勉強した人が参加できる。
- (b) シニア カテゴリーのエッセイは2500語以内で書く。
- (c) 参加者の年齢は30歳以下でなければならない。

③エッセイの評価

- (a) 専門家の委員会が各エッセイを評価し、その決定が最終的なものとなる。エッセイの出来栄えを審査する際に考慮される要素は、エッセイの内容、レベル（学校／ジュニア／シニア）に適した文法、言語、語彙、文の構成、正しいスクリプトの使用、きれいな手書きなどがある。
- (b) 提出されたエッセイはオリジナルである必要があり、参加者はエッセイを書く際に誰かまたはいかなる情報源からも助けを得てはいけない。
- (c) エッセイの言語レベル（語彙と慣用句の使用）は、参加者の日本語学習レベルに対応している必要がある。
- (d) エッセイは単語数制限を超えてはならない。
- (e) 参加者は政治や宗教に関するエッセイを書いてはならない。

【担当教員】

Sweety Gupta, Ph.D (Japan Women's University)

Lecturer of Japanese Language & Literature, Department of East Asian Studies,
Faculty of Social Sciences, University of Delhi

【審査内容】

審査基準は語彙、漢字、文法、流れそして内容を中心に判断した。そして、それぞれにコメント・フィードバックも行った。

【審査例】

[Senior] カテゴリー

第1位 コメント

- ①構成の工夫が良い。最初はソーシャルメディアがどのようなものかについて、次に現代社会について、そして課題、さらに自分の体験について書いてあり、伝えたいことが理解しやすい。

- ②「その結果」「徐々に」「そして」「最後に」など接続詞の使い方が適切で、話の内容が読み取りやすい。
- ③「宝物のよう」「縁の下の力持ち」「世界を一つの地球村」「多くの人々の物語」など、比喩を用いて、読者の印象に強く残る言葉を使うことができている。

第2位 コメント

- ①はじめに定義、次に世間一般の話を取り入れていて、読みやすい構成になっている。
- ②「なぜなら～からだ」「したがって」など、説明に使う言葉を効果的に取り入れることができている。

第3位 コメント

- ①「まるで～のような」という比喩を効果的に使うことができている。

【考察】

日本語で作文を書く上では自分の思いに適切な言葉を選ぶ語彙が必要になる。インドの方々が日本語を熱心に学習していることが、語彙の種類から想像できた。日本人でも日頃使わない表現も作文に見られたので、インドの方々が参考にしているテキストの影響が大きいにあると感じた。例えば、日本のニュースやバラエティ番組などを視聴することで、現代の日本語を取り入れていくことができると感じた。また、審査を通して、インドの方々が日本語に興味をもってくれていることに、日本人として喜びを感じた。

(2) 現地校を訪問し、日本語教育を参観した。

訪問先：Bluebells School International ニューデリー日本人学校とは30年以上の交流がある。

【日本語の授業】

- 日本語学習のテキストを使用して授業をしている。
- 会話や文法を学んでいる。テストも実施している。
- 日本語学習専用の教室がある。教室には日本らしさを感じる物が多く掲示され、紹介されている。
- 日本語の教科書は、Japan Foundation (国際交流基金) が発行しているものを使用している。

4 まとめ

日本語を学ぶインドの方々の多くは、日本に良いイメージをもっている。日本のアニメや文化に興味をもち、いつか日本に行きたいと考えたり、日本企業への就職を希望したりしている。そのため、熱心に日本語を学んでいた。日本語教育としてはテキストで文法を学んだりアニメなどを観たりして、学んでいる人が多い。この研究を通して、言語を学ぶということは、テキスト以外からのアプローチや何のために学んでいるのかという目的を明確にすることが大切であると感じた。

引用参考文献

- UME（うめ）・もも・みんなの日本語（日本語教育テキスト）
ジャパンファンデーション：国際交流基金 <https://www.jpf.go.jp/>